様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１６日現在

機関番号：32634
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２３２０１２３
研究課題名（和文）近代市民規範のポリティクス－「社会改良」の複合的メカニズムに関する史的考察
研究課題名（英文）Making Modern Citizens: Politics, Cultures, and Struggles for Social Reform
研究代表者
樋口　映美（HIGUCHI　HAYUMI）
専修大学・文学部・教授
研究者番号：80238287

研究成果の概要（和文）：２１世紀を生きる私たちは、経済力や文化が境界線を越えて他地域や他国に浸透していくさまを目の当たりにしている。その浸透のありさまは現代のみならず近代にも共通していたであろうという見地から、「社会改良」を掲げた社会進化論や優生学などの科学的知がグローバルに伝播し主として１９世紀から２０世紀にかけて社会「改善」のために実践され、巷の人種観やジェンダー観と絡んで近代秩序を形成してきたプロセスを検証した。

研究成果の概要（英文）：Living in the twenty-first century we have witnessed economic powers and cultural phenomena easily cross regional and national boundaries and permeate into other regions and nations.　We attempted to see the development of the modern world order in a similar perspective, considering such issues as race and gender.　Accordingly we examined modernization as a process that developed under the flag of “social reform,” keeping in mind that Social Darwinism, eugenics, and other theories were practiced to “improve” society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2011 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2012 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
年度			
年度			
総　計	11,700,000	3,510,000	15,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：グローバル化、人種、移民、ジェンダー、社会思想、優生学、遺伝学

１．研究開始当初の背景

（１）新しい課題：本研究プロジェクトの研究代表者（樋口映美）が同じく研究代表者として 2002 年度から 3 年間取り組んだ科研費プロジェクト基盤研究（Ｂ）（課題番号 1430183）の成果を中條献（研究分担者）との共編で『歴史のなかの「アメリカ」―国民化をめぐる語りと創造―』と題して出版し、

その結果として「国民意識」醸成期に新たな社会秩序がグローバルに構築されてきたことを検証するという新たな課題が生まれた。

（２）地域の選考：地球をすべて網羅することはできないので、主たる領域として便宜的に４地域に焦点を定めることとした。その理由は、以下のとおりである。まずイギリスは、優生学や社会進化論など科学的「知」のうまれた地域として、次にアメリカは科学的知が19 世紀末から 20 世紀にかけて積極的に実践され浸透した地域として、第三にドイツはアメリカで進展した科学的知の実践を参照してナチ党による虐殺が実施された地域として、最後に日本は欧米の科学的知を受容してきた地域でもあり本研究プロジェクトに関わる研究者が在住している地域として重要であると考えた。

２．研究の目的

イギリスに端を発する社会進化論や優生学などの科学的知がグローバルに伝播したことを念頭におき、各地域での「社会改良」の展開のありようを解明することを目的とする。

３．研究の方法

（１）実証研究のための各論の設定：研究代表者・研究分担者 10 名・連携研究者 1 名・研究協力者 1 名が各自、イギリス・ドイツ・アメリカ（U. S. A.）・日本のいずれかに着目し、社会改良のメカニズムとその共時性を実証的に検証することとした。そのためには、「社会改良」という本研究プロジェクトの大きな命題を共有し念頭におく一方で、各自が自身のフィールドに立ち返り具体的なテーマを設定することとした。その結果、樋口映美はサンドマングも射程にいれて 19 世期初頭のアメリカ南部チャールストンにおける奴隷蜂起を、日暮美奈子は港市ブレーメンで往来する人々に注目して婦女売買の事例を、兼子歩はニューヨークでの世直し組織として活動した十四人委員会の報告書を、中野耕太郎はシカゴにおける貧困と移民と人種の関係を、岩井淳はイングランドにおける国家と身体をめぐる思想展開を、永島剛は 20 世期初頭のイギリスにおける遺伝学と社会改良の展開を、貴堂嘉之は優生学を念頭に置いた優良児育成プログラムを、小野直子は優生学における堕胎実践を、平体由美は民間による公衆衛生の浸透をアメリカ南部について、白川耕一はドイツにおける第二次世界大戦後の福祉国家としての動向を、高田馨里は第二次世界大戦前後のアメリカ軍における人種の問題を、加藤千香子は日本における戦後の在日帰還運動の展開を、黒川みどりは 1950 年代以降の同和教育における問題を、それぞれ各論として設定した。

（２）現地調査と分析：研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者が各自の各論テーマに沿って史料集めと分析を実施することとした。史料集めは、1 年目に樋口映美・兼子歩・平体由美・高田馨里がアメリカで、岩井淳がイギリスで、加藤千香子が日本で、白川耕一がドイツで、2 年目には日暮美奈子がドイツで小野直子と中野耕太郎がアメリカで、黒川みどりが日本でそれぞれ現地調査を予定どおり実施した。

（３）多様な研究会の場と発信：日本での合同研究会をはじめ、アメリカでのワークショップ、東京での国際シンポジウムやワークショップなど、研究途上での議論の場を数多く設けた。研究代表者のホームページを使って、研究の進展を掲載した。

①合同研究会：1 年目と 2 年目には 6 月・9 月・12 月に専修大学神田キャンパスにおいて研究会を開催し、3 年目には 6 月に東京で半日のワークショップをしたうえで、9 月に 2 泊 3 日の合宿形式の研究会を仙台（東北大学川内北キャンパス）で集中的に実施した。

②国際的な共同研究：University of North Carolina at Chapel Hill（以下 UNC-Chapel Hill）の歴史学部と 2 年にわたって相互協力を実施した。初年度は、ワークショップ（2011 年 9 月 8 日～10 日）を UNC-Chapel Hill キャンパスで開き、日本からは樋口映美・小野直子・日暮美奈子・兼子歩・中野耕太郎・黒川みどり・平体由美が参加した。次年度は、UNC-Chapel Hill 歴史学部の研究者 3 名（William Miles Fletcher III、Susan D. Pennybacker、Heather A. Williams）を招き東京において同時通訳付きの公開シンポジウム（2012 年 6 月 9 日）を開催した。本研究プロジェクトでは、それぞれアメリカと日本で学術的交流を相互に展開することを目指した。

③中間報告書の作成：本研究プロジェクトと UNC-Chapel Hill との 2 年にわたる学術上の国際的交流については、中間的報告書『近代市民規範の形成（Making Modern Citizens)』（総 235 頁）を 2012 年 10 月 15 日付で発行し、関係者および関心のある方々に配布した。

４．研究成果

＜近代＞なるものを批判的にとらえる研究は多数あるが、いずれも特定の地域や国家に限定し、しかも、＜近代＞を所与のものとみなしている場合が多い。それに対して、本研究プロジェクトは、＜近代＞を特定の既存の状況とみなして＜近代＞とは何かを問うの

ではなく、むしろ、「社会改良」という側面に焦点をあてることによって、19 世紀から 20 世紀にかけて共時的にトランスナショナルに進展した社会秩序形成のプロセスやメカニズムを解明しようとした。そうすることによって、＜近代＞を根本的にとらえなおす必要のあることを提示するものである。各論的には、おおまかに言って少なくとも以下の 3 点の新知見を得るに至った。

（１）科学的「知」の受容と実践：優生学・社会進化論・遺伝学などの科学的「知」が思想から実践への道をたどりつつ伝播する際、社会に望ましくない「不適者」と望ましい「適者」が想定され、前者が排除あるいは隔離される場合もあれば、「適者」として育てられることにより対等な社会参加を目指す運動をうむ場合もある。また、「適者」でもなく「不適者」とも断定できない中間的存在に困惑し、「適者」「不適者」の枠を修正させる場合もあった。つまり、各地域における「社会改良」の実践は、科学的知を受容する伝播先の歴史的・社会的土壌によっては異なる意味合いを伴った。

（２）「社会改良」の実践と通報社会：通念としての「社会改良」が福祉や公衆衛生の面で、あるいは平穏な秩序形成のために政策として具体的に機能するとき、「人種」「移民」「ジェンダー」といった、それ自体社会認識の変化するイシューと複合的に絡まること、また、その絡まりのメカニズムには為政者や指導者のみならず通報者としての一般住民が自発的にかかわることが具体的に検証された。つまり、ジェンダーや人種や移民をめぐる社会不安や疑念が「社会改良」を目指す通報社会の根底にあることが判明した。

（３）科学的「知」の伝播によるグローバル化：「社会改良」を掲げた科学的知の実践は、それらが萌芽したイギリスのみならず、境界を越えて他国や他地域に伝播し、国家や市町村、さらには民間組織や軍隊などによってグローバルに浸透していったことも検証された。ただし、その伝播のありようは、一様でもなく、広域を一度に覆い尽くすような普遍性を示すものでもない。それは、多様なせめぎ合いを見せながら、ときには共時的に、ときには相互関係を伴いながら、徐々に固有の土壌に根をおろしていったのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 22 件）

①黒川みどり、大阪人権博物館と橋下市政、歴史評論、査読有、754 号、2013、73-83

②岩井淳、コモンウェルスを創出する―ピューリタン革命と政治文化、静岡大学人文論集、査読無、63 号、2013、41-74

③樋口映美、20 世紀米国の「カラーブラインド」という遺産―「暴力」の忘却と秩序形成、専修史学、査読有、53 号、2012、120-149

④平体由美、研究史展望―ロックフェラー財団の医療・公衆衛生活動と文化外交、札幌学院大学人文学会紀要、査読無、92 号、2012、111-118

⑤中野耕太郎、衝撃都市からゾーン都市へ―20 世紀シカゴの都市改革再考、史林、査読無、95 巻 1 号、2012、209-246

⑥日暮美奈子、ドイツ福音派婦人連盟と婦女売買撲滅運動　1899-1902 年、専修史学、査読有、52 号、2012、(1) - (26)

⑦小野直子、第二回国際優生学会議、富山大学人文学部紀要、56 号、査読無、2012、93-108

⑧岩井淳、17 世紀ブリテンの複合国家と他者認識―ウェールズとアイルランドの場合―、歴史学研究、査読有、885 号、2011、175-184

⑨中野耕太郎、How the Other Half Was Made: Perceptions of Poverty in Progressive Era Chicago、Japanese Journal of American Studies、査読有、22 号、2011、63-87

⑩岩井淳、「大反乱」から「ブリテン革命」へ、イギリス哲学研究、査読有、34 号、2011、97-105

⑪小野直子、生殖の権利と社会福祉―断種におけるインフォームド・コンセント、アメリカ研究、査読有、45 号、1-17

⑫樋口映美、アメリカ合衆国の人種秩序をめぐる近況、歴史学研究、査読有、865 号、2010、33-42

⑬加藤千香子、1970 年代日本の「民族差別」をめぐる運動―「日立闘争」を中心に―、人民の歴史学、査読有、185 号、2010、13-24

〔学会発表〕（計 23 件）

①日暮美奈子、婦女売買の作られ方―20 世紀初頭ブレーメン警察史料から、ドイツ現代史学会、2013 年 3 月 29 日、東亜大学

②黒川みどり、戦後／差別の諸相、東京歴史科学研究会、2013 年 2 月 2 日、早稲田大学

③岩井淳、コモンウェルス概念の史的変遷、イギリス帝国史研究会、2012 年 12 月 9 日、大阪大学

④平体由美、生政治研究史概説―「病気」の社会的文化的構成、アメリカ医療史研究会、2012 年 12 月 1 日、京都産業大学

⑤永島剛、The triumphant return of Baron Takaki to London in 1906, as a disciple of British epidemiology、Anglo-Japanese Conference of Historians、2012 年 9 月 13 日、Cambridge, UK

⑥貴堂嘉之、移民国家アメリカのシティズンシップ再考―「長い 19 世紀」のヒトの移動のグローバル・ヒストリーから、日本西洋史

学会、2012 年 5 月 20 日、明治大学
⑦樋口映美、アメリカ南部の奴隷制秩序形成とハイチ革命、日本アメリカ史学会、2011 年 9 月 18 日、北九州市立大学
⑧岩井淳、17 世紀ブリテンの複合国家と他者認識―ウェールズとアイルランドの場合、度歴史学研究会大会、2011 年 5 月 22 日、青山学院大学
⑨黒川みどり、近代日本社会における被差別部落民、日韓歴史家会議、2011 年 10 月 28 日～30 日、ソウル
⑩兼子歩、セクシュアリティが＜人種＞をつくる―ニューヨーク「十四人委員会（The Committee of Fourteen, New York City)」調査報告書より、九州歴史科学評議会、2011 年 2 月 26 日、西南学院大学
⑪小野直子、優生断種と医療倫理、アメリカ学会、2010 年 6 月 6 日、大阪大学

〔図書〕（計 24 件）
①黒川みどり、社会の境界を生きる人びと、岩波書店、2013 年、158-186
②岩井淳編、複合国家イギリスの宗教と社会、ミネルヴァ書房、2012 年、248 頁
③樋口映美編、流動する＜黒人＞コミュニティ―アメリカ史を問う、彩流社、2012 年、284 頁
④貴堂嘉之、アメリカ合衆国と中国人移民―歴史のなかの「移民国家」アメリカ、名古屋大学出版会、2012 年、368 頁
⑤黒川みどり、描かれた被差別部落―映画の中の自画像と他者像、岩波書店、2011 年、206 頁
⑥高田馨里、オープンスカイ・ディプロマシー―アメリカ軍事民間航空外交 1938-1946、有志舎、2011 年、277 頁
⑦日暮美奈子、人の移動と文化の交差、明石書店、2011 年、134-158
⑧日暮美奈子、移動と定住の文化誌―人はなぜ移動するのか、彩流社、2011 年、43-79
⑨木本喜美子・貴堂嘉之編、ジェンダーと社会―男性史・軍隊・セクシュアリティ、旬報社、2011 年、392 頁
⑩黒川みどり、近代部落史―明治から現代まで、平凡社新書、2011 年、267 頁
⑪加藤千香子、成長と冷戦への問い、大月書店、2011 年、39-78
⑫黒川みどり編、近代日本の「他者」と向き合う、解放出版社、2010 年、423 頁
⑬岩井淳、ピューリタン革命と複合国家、山川出版社、2010 年、90 頁
⑭黒川みどり、由緒の比較史、青木書店、2010 年、303-336
⑮小野直子、アメリカ合衆国の形成と政治文化、昭和堂、2010 年、208-277

〔その他〕
ホームページ等
http://www.isc.senshu-u.ac.jp/~thb0668/kyodo%20kenkyu-3.html

６．研究組織
(1)研究代表者
樋口　映美（HIGUCHI HAYUMI）
専修大学・文学部・教授
研究者番号：80238287

(2)研究分担者
貴堂　嘉之（KIDO YOSHIYUKI）
一橋大学・社会（科）学研究科・教授
研究者番号：70262095

日暮　美奈子（HIGURASHI MINAKO）
専修大学・文学部・准教授
研究者番号：30384671

岩井　淳（IWAI JUN）
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：70201944

小野　直子（ONO NAOKO）
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：00303199

加藤　千香子（KATO CHIKAKO）
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：40202014

兼子　歩（KANEKO AYUMU）
長野県短期大学・多文化コミュニケーション学科・助教
研究者番号：80464692

黒川　みどり（KUROKAWA MIDORI）
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：60283321

高田　馨里（TAKADA KAORI）
明治大学・文学部・助教
研究者番号：40438172

永島　剛（NAGASHIMA TSUYOSHI）
専修大学・経済学部・准教授
研究者番号：00407628

平体　由美（HIRATAI YUMI）
札幌学院大学・人文学部・教授
研究者番号：90275107

(3)連携研究者
中野　耕太郎（NAKANO KOTARO）
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：00264789

(4)研究協力者
白川　耕一（SHIRAKAWA KOICHI）
國學院大学・兼任講師
研究者番号：無